

2020年5月23日（土）18時～19時30分

## 連続カンファ withコロナの時代「シニアの暮らし方」はどう変わる？ # 1

（敬称略です。なお、発言者名はZoomに提示されていた名称を使用しています。）

佐藤

今日はありがとうございます。withコロナの時代、シニアの住まい方はどう変わるか？ということで今日は話を進めていきたいと思います。

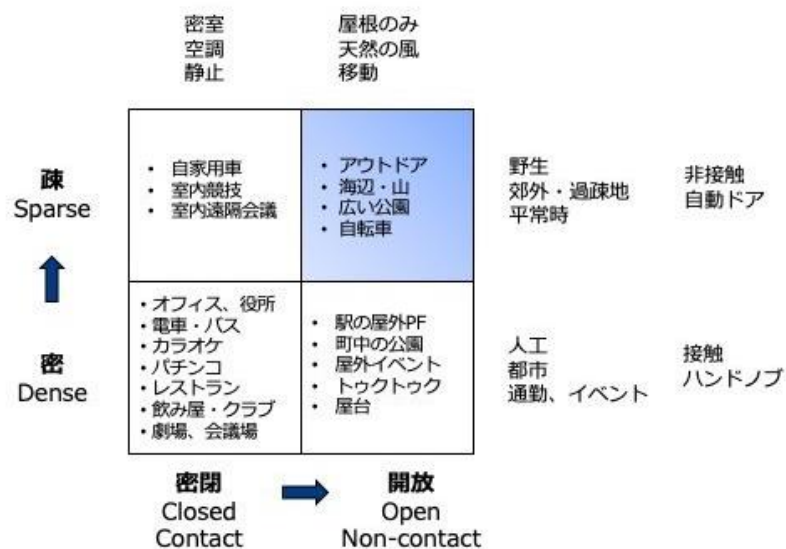
緊急事態宣言が解除されて、元の生活に戻れるのか？はたまた「新たな日常」と言われてますけども、違う暮らしを求められていくのか？

政府からも「新しい生活様式」のガイドラインが発表されて私も目を通しましたが、飲食店とかそういう業界は出ていますが、介護施設とかシニアの住宅とかについてはまだ示されていません。これはきっと相当難しいんだと思っています。介護施設なんかでいうと、人員配置が3対1でいいのか？とか、設備基準の利用者1人あたり3㎡くらいとかでいいのか？とか、**今までのシステムそのものを壊すところまで踏み込ま**なきゃいけないと思うんです、本当は。でも今そこまでは多分できなくて、これは相当これから混乱するんじゃないかと。

あと、少し先に僕の方からお話をさせてもらおうと、「シン・ニホン」の安宅さんが「**開疎化**」という概念を打ち出されてるんですね。今までは密でクローズで閉じられることで**効率性や利便性を追求**し続けて、それを文明として扱ってきたわけですけど、それが突然命を脅かすリスクになってしまった。そうすると安宅さんは何を言っているかという、開かれていて、オープンで、「疎」であるところがこれからのステージになると。

そうすると地方はこれからのメインストリームになっていくチャンスが大いにあるということだと思うんです。

### 開疎化と空間



そういうことも踏まえながらも、「新しい日常」なのか「新たな日常」なのか、それに合わせていろんなことをRe designしなきゃいけないこの時代の、**なにをどうしていけばいいのか**、いろいろお話ししたいと思っているんですけど。

コロナによってのこの2～3ヵ月まったく違う日常だったと思うんですけど、松田さん、どうでしたか？

松田

人との距離感っていうのが結構変わってきている気がしますよね。東京にいと高齢者施設以外でもフィットネスクラブなんかシニアの人ばかりで、そこですごいコミュニティがあったんですけど、今全部止まってるわけなんで。そういう人たちは本当に、今集う場が無いというのはすごい寂しい気がしましたね。働き方っていうのはまた後にして、住まい方で言うと**人との距離感**っていうのが、今問われている気がしましたね。

佐藤

松嶋さんはどうですか？

松嶋

そうですねまあ個人的なことも含めて、あの言っちゃいけないんでしょうけども、だいぶコロナのおかげで自分らしさっていうか、**人間らしさを取り戻した**なという印象がありますね。

今まで何でしょうね、岩手の言葉で言うと、多少「なったき」してたと思うんですよね。

佐藤

「なったき」って何ですか？

松嶋

「なったき」って、ようは調子に乗ってるっていうことなんですけど。

しょっちゅう東京に出張してみたり、アメリカに出張してみたりとかして、自分が何かやってる感があったんですけど、もう新幹線も飛行機も含めてアメリカも来ちゃダメみたいな感じになって、自分のコミュニティで生きるしなくなったので、とにかくそのまま私がやっているオークフィールドを守ろうということで。

今まではオークに住んでる方も昼はデイサービスに行ったり、あちこち買い物に行ったり、まあそれなりに田舎ながらにやってたんですけど、そういうのも駄目になって。逆にオークの中に留まったりとか、やることないから畑行ってみようかとか、畑とかも頑張って始めた人もいるし、デイサービスに行かなくなったので逆にあのオークテラスっていうレストラン棟があるんですけどね、今日もそこで二人くらいのおばあちゃんがずっと楽しく話をしてるんですよ。

実は案外これってデイサービスとかが普通にあった時代はあんまり見られない、つまり昼は結構それなりにみんなお出かけしたりとかしてたのでなかったんですよね。でもどこにも行けないみたいになった瞬間に、まあそこそこ引きこもりながらも、近い人と会話を楽しむようになったりとか。滅多に行かない畑に出て作物育ててみたりとか、スタッフとも話をしたりとか。

だから僕も家族の時間も持てて、自分も畑に行くようになったりとかして今まで外に外に向いてたのが、内に内に向いて、なんていうか、新たな豊かさと言うか、人の優しさっていうか、そういうのが見つかって、かえって良かったなと思いますけどね

佐藤

あーなるほど。確かに僕も、沖縄に来てもう7年目かな。7年目なんですけど、だいたい沖縄にいられる期間って1ヶ月のうち一週間か10日で、長くて2週間。それでまた東京に戻って仕事をとかで、2ヶ月まるっというって初めてなんです。それ以外は本当ずっといなくて今二地域居住的な。この2ヶ月、全然違いますよね。松田さんなんかもそうでしょうね、多分日本しょっちゅうあちこちあちこちそういう、それこそ出張してたので初めてじゃないですかこんな時間の過ごし方になったのは。

松田

会社が結構早く決断して2月の末からもう出張禁止で在宅勤務になったので、僕はもうまるまる3ヶ月近くこういう暮らしをやってるんですけども、全く出張に行かなくなったんで、こもって仕事をするが増えましたね。コツコツとものを書くだとか調べものをするだとかには適していると思いましたけれども。

あと、こういうオンラインミーティングが極めて便利だということが分かりましたよね。

誰とでもこういったことができるので。ただなんでしょうね、これも壁があって、リアルに会っていない伝わらない部分も多いし、あとはアイデアを思いつくかって言うと、リアルに話して新しい発想が出てくる時の方が僕は多くなって感じたんですよね。それは僕が昭和の人間だからかもしれないけど（笑）。

オンラインミーティングってやっぱり情報を共有するには適しているけれど、何かつくり出すっていうのには僕はなんかまだ合わないなって気がしましたね。

だからやっぱり解除されて外に出ていきたいと思っているんだけど。

でも**今東京から地方に行く**と嫌がれる感じが。。。ちょっと夏以降かなって思っていますけど。

佐藤

僕も東京戻ったらほんと沖縄に戻って来れなそうな気もしないでもないし。

そこら辺の人の移動ですよ。逆になんだろうな、そこはどうやったら解除できるんですかね。なんかテクノロジーとかあるんでしょうけど、何かテクノロジーっていうのもなんか嫌だなんていう気もするし。

松嶋

そもそもその出る必要があるのかっていうのは最近・・・なんていうんですかね、やっぱ地方ってかなり都会に対するコンプレックスってあると思うんですけど、僕はいつの日かそういう都会に対するコンプレックスはなくなっただんですけど。別に今こうやってオンラインで繋がれるしあと僕はあのかなりあの誰も信じてくれませんが、すごい人見知りなので。

佐藤

信じないです（笑）

松嶋

いや本当にそうなんです（笑）。だから会わなくて済むようになったのでかなり気楽なんですよ。だし、後はまあ、もうなんだろうな、**美味しい野菜はすぐそばにあるから別に買いに行く必要もないし**。あ、買いには行きますけど（笑）。

なんかね、特に**グローバルに出て行く意味があまりなくなった感じ**がするのでそんなに困ってないですね。むしろ余計な会議とかも減っていいなと思って。

佐藤

オークに住んでるシニアの方々の日々と、あと僕の母が85歳なんですよね。85歳だけど今実家に姉と住んでて母親が暮らしてる暮らしと、東京で独居とか老々世帯で暮らしてる方々のこの日々のこの2ヶ月の暮らしを考えると、オークでの暮らしのほうがたぶん豊かなんだと思うんです。

ただ、そのオークはいわゆるサ高住ですよ。どこのシニア向けの住宅もオークみたいなクラスが送れるかというところじゃなくて、僕のFacebookでもちょっとぐるぐるしてること書いたんですけど、こうなってしまったからこそ**凄いい管理強化型**じゃないんですけど、**介護施設もあとシニアの住宅やってる事業者もリスクマネジメントにか一って一気にふれる**気がして、嫌だなって思ってるんですよ。

松嶋

僕は介護事業所もやっているんで、かなり早い段階で閉鎖を決めたと思うんですよ。閉鎖というよりも休止。

というのは、かなり狭い間隔に利用者同士が座っていて、この間にさらに介護が入って、密の中に密に入ってるんですよ。食事介助とかしながら。それを見てこれはどうやっても抑えられないっていうのがわかったし、その多分その辺りですよ、あの学校が休校になったけど学童保育はやるとか、幼稚園を休むんだけど保育園はやるとか。

このなんたる、その保育園とか学童をやる理由が、働く親を守るためとかね、そういう理由で開いてたじゃないですか。介護事業所も多分同じようなことがあって、その働く人を守るためにおじいちゃんおばあちゃんを預からなきゃいけないんだ、っていう論調があったと思うんですよ。

何人かのデイサービス事業所で働いているひとと喧嘩したんですけど、本人死んだら どうするのさって。それに対する答えはないわけですよ。働く家族のために、じいちゃんばあちゃんがそこに行って、そこでクラスターになって死んだらどうするんだって言って。もちろん、それに対する答えは誰も出せなくて。だったらデイサービスだって早く休んじゃって、**みんなでね、共存できる社会、やり方を目指そうよ**って言って。

僕は介護事業所早々に閉じて、自宅への訪問サービス、まあ自宅に訪問するのも危険だと思ったんですけど。とか、ちょっと話あちこち飛びますが、オークフィールドもデイサービスはだから一番危険だから行かない方がいいと。その代わり**オークでちゃんと三密を回避して、楽しいことやるから**って言ったら、ちょっと抽象的ですけどまあそこそこ色々面白いイベントはできてますよね。

佐藤

デイサービスに行かなくなっちゃった途端に自宅で孤立してしまう現状が多分すごい問題なのかも知れないですよ。フランスなんかロックダウンしたじゃないですか。ただ買い物行くとかに許可書を自分でプリントアウトしなきゃいけなかったですよ。でもあれをできないシニアの方がマンションには結構住んでたみたいで、わざわざ自分でインターネットでその許可証のブラウザを開いて、名前を打ち込んで、プリントアウトしてっていう、できないシニアの方々は、その集合住宅とかに住んでる若い子達が助けてあげたりみたいなことがちらほらあったらしいんですけど。

**デイサービスが閉鎖しましたって安心して閉鎖できないこの環境**ってうんですかね。自宅に戻っても、引きこもりながらも、文化的な暮らしもできたり、困りごとがちゃんと助けてくれる関係性があれば、そこまで介護の人たちがもうセーフティネットのようにギリギリまでやらなくてもいいかもしんないですよ。多分都市の人なんかフランスのロックダウン状態になったらすごい困るんじゃないかなと思って。

松嶋

いや、だから、東京なんかは今非常事態宣言だって言ったって、買い物とかは最低限行ってもいいわけじゃないですか。オークフィールドなんてやっぱりあの買い物行くにしても相当歩かなきゃいけないので。下手すると熊とか出ますから（笑）。熊とかねあと最近はキツネ。キツネだとエキノコックスとかって強いウイルスがあって、コロナよりも強いんじゃないかっていう。そういうのと戦いながらスーパーまで歩いて行くけど結構危険なわけ。

東京は近所にスーパーもあるし不便はないわけですよ。と、僕は見てるんですが、何人かからやっぱりかなり悲鳴に近い電話を頂いて、東京の人から。とにかく自然豊かなところに行きたい、疎かいしたいと。疎かい

という言葉もその地方に対してどうかと思いながらも、**自然豊かなところ行きたい**と。僕はこれが普通なんですけど、すごい疲れてるって言うんですよ東京の人が。

田舎から言えば、便利だしね、人もいっぱいいるし、なんでそんな疲れるんだろうなと思って。スーパーで熊とか狐に合わないように気をつけて行かなきゃいけないわけじゃないのに、**なんでそんな東京でみんな疲れてんだろ**って。

佐藤

松田さんどうですか？ 沖縄もね、そんなに疲れていないです。

松嶋

こっちもそんなに疲れていないです。

佐藤

オンラインミーティングなんかが続いたりしたときの疲れはありますけど、行動範囲が制限された中で暮らすってことでの疲れっていうのはそんなにないですね。松田さん、そこら辺の感覚ってわかります？

松田

んー。それはそうだと思いますね。例えば一般のシニアのコミュニティであればスポーツクラブとか普段会うところが会えなくなっていますよね。シニアの住宅で言えば今面会禁止ですよ。あとアクティビティも禁止ですよ。室内の。食事レストランで取るときには離れて、対面じゃなくてとか、部屋に配膳とか。クルーズ船と一緒にですよ。それはストレスがマックスになると思いますよね。

松嶋

地方にいとジムに行って運動はする人はしますけど、ジムに行くんじゃなくて、そのほんと熊とかが歩くような道を歩いたりとか、裏庭を散歩したりとかだし、食事だって食べに行くところないし。月に1回の外食をちょっと豪華に行こうかみたいな感じなので、まあそれが行けなくなっただけだねとか。ストレスを感じるポイントが違うし、そもそも多分東京の人がストレスを感じてるところの環境が地方にないから感じようがない。むしろあの今東京とか他県ナンバーの人叩く岩手のやつらとかがいるんですけどね。そういう妙なストレスを感じてる奴はいますよね。

佐藤

そういう意味で行くと、さっきのあの開疎化ってその右上の開かれて、オープンで、疎でっていうところがこれからの文化とか文明のメインストリームであるとすると、あの東京都にシニアが住むってこと自体、東京に限

らずですけど、その密でクローズな、効率性とか利便性ですとつづつてきたその都市ですよ、その**都市にシニアが住む理由ってのがwithコロナの時代にあるのかどうか**っていうのは一つの疑問なんですよ。

**都市の中でも豊かに暮らせるっていうものが作れるのかどうか**っていうのがあって、僕自身も田無でシニアのシェアハウスを本当だったら4月にオープンしてるはずなんですけど、この時代にちょっと今止めてと言うかちょっと調整しなきゃいけないことがあるなあって。田無は大都会ではないですけど、ただ東京は東京でゴミゴミしてて、そこでシェアハウスにシニアが集まって暮らすということの意味がwithコロナの時にあるのかっていうのはね、まだ答えが実は出てなくて。

一人で暮らすよりはマシだろうなっていうのはなんとなくあるんですけど、ちょっとねっていうのがまだあります。子供とも孫ともしょっちゅうは会えないんだとするならば、近居ってどこまで意味があるのか、とか。豊かなところに離れていった方が2時間でも3時間でも、月一回とか半年に1回だったらそれくらい離れても大して変わらないんじゃないかっていう気もするし。そこらへんずっとぐるぐるしてるんですよ。意味あるんですかね。都市のところにシニアが住むっていうのは。

松嶋さん岩手だからあれですけども。もし参加してる方でも何か意見あったらちょっとあの随時マイクをオンにしてもらって入ってもらってきてもらえればと思うんですけど。

若山

私の家族が横浜にいます。娘と孫がいるんですが、娘がですね、買い物に行くのに子供4人とそれから旦那の分全員で5人の食事の食材を近くのスーパーまで今までは孫連れてわいわい行ってたわけですけど、今は最低限の人で来てくださいと。かなり重労働なんですよ。田舎だとね、車でポンポンっていけるんですけど、それができないんですよ。都会は便利なのは便利だと思います。今までは。今までは短時間でいろんなところにアクセスできて、車を使わなくても電車とかバスとかで。スーパーに行くのも歩いて行ける。それこそ熊も出ません、キツネも出ませんが、5人分の食材を買いに行く、これは結構大変です。1人でも孫を連れていければ、それはそれで手助けになるので、いいと思うんですけど。

佐藤

あー。なるほど。ありがとうございます。

確かに、今まで**都会で便利だったことが便利じゃなくなる可能性が出てくる**、逆転するのはありますよね。

わかやm

もう一点、都会の中で最近言われているのは**自粛警察**です。

佐藤

自粛警察はすごいおっかいテーマになると思っているんですよね。住まい方を考える意味でも。さっきのその孫が会いに来るって言った時に地元の人たちがみんな嫌だったら嫌ですよね。

岩手って感染者ゼロだったじゃないですか。松島さんの Facebook でも出てましたけど、これってそう簡単になくならなそうじゃないですか。

松嶋

この前やっぱりお子さん方が東京にいるっていうパターンはかなり多いので、この前も患者さんが一人私どもの施設で亡くなった時、とてもお母さん思いの息子さんだったんですよね。僕はそれをずっと見てたから僕が盛岡の孫のような感じでね、ずっと見てて。亡くなる3日くらい前に、なんかあのもうクローズドだから言うと、もう死にそうだったんですね。なら僕は本人に、俊さん大好きな息子さんに死に目に会わせてやんなきゃいけないから、親の務めだろうからもうちょっと頑張れって言ったら、ニコニコしながらわかった頑張るって言うんですよ。やっぱりちゃんとまあなくなってね。朝だったから、息は止まったけど、私が死亡診断するまでは死んでないんですよ。だから息子さんに会わなきゃダメだから、息子さんに真っ直ぐ帰ってきて。ただ、車で帰ってくると石投げられるから、まず新幹線で帰ってきて、自宅に帰ってそこにまだ死亡診断前のお母さんを返して、そこで死亡診断をしっかりとつけて、親の死に目に会えたねっていう儀式的にやろうと思ったんですけど。なんかですね、コロナの影響であの岩手の火葬場も半分くらいしか稼働してなくて、隣町の火葬場が空いてると言われて、明日の午前中だったら火葬してやると。でもそのためには11時までには診断書をよこせてんですよ。でもそんなの息子さん帰ってこれないから結局は診断書書いて。何の話か分からなくなってきましたけど、診断書書いてね。息子さんがこっそりやっぱり帰ってきてね。ほとんど葬儀もあげられずに、お墓はなぜか東京だったのでこっそり返ってね、僕も最後会えずにいましたけどね。

佐藤

こっそりしないといけないのは切ないですよね。僕もニュースで見ましたけど、特にお子さん世代がやっぱり都会にいて、**親がその岩手とか地方に住んで、今までは毎週末帰ってその在宅介護が補えないところも息子さんや娘さんが頑張ったりしてたのが帰れなくなって**。そうとう困ったと思うんですよね。困っただろうし、貴重な一緒にいられる時間が奪われる。そう考えるとやっぱり今まではその週一回帰ってということよりも多分違う暮らし方とか考えなきゃいけないし、都会もやっぱり先の話に戻るあれですけど、都会に住むシニアの世代が都会に住む価値あるのか。逆にシニアだけじゃなくて、若い世代もですよ。若い世代とかビジネスパーソンも今都市にいる意味があるのかって多分考えている人多いんじゃないかなと思って。

松田さんなんかはもうビジネスパーソンのは気持ちすごいよくわかると思うんですけどビジネスパーソンが都市にいる意味ってなんかあるんですかね。

松田



東京にいる利点はやはり、情報量が多いってことですよね。人と会うのにもほとんどどんな人でも1時間かからないですよね。人と会うだとか仕事するだとか、夜楽しむだとかそういうのには適しているのは間違いありませんよね。

会社も役所も東京にあるからですよね。東京に住む利点ていうのはそういうことでしょうか。

でも今回僕が思ったのは、満員電車おっかないですよね。

佐藤

品川の景色を見るたびにすごいなって見えました。

松田

通勤を、2月の終わりにやめちゃったんですけど、1月くらいから電車の中で咳をするだけで視線が痛いとか。僕は花粉症なんですけど怖くてくしゃみができない。**咳とかくしゃみするだけで露骨に嫌がられるというのはあったんで、暮らしづらい**ということですよ。

働き方の方に話をすると、3ヵ月在宅して分かったのは**どこでも仕事できる**など。

共有だけさせてもらおう（リモートワーク写真）。こんなことができますっていうのが。これ八幡平でリモートワークした時なんですけど。ちょっとやらせっばいけど（笑）。でもね、こういうことがもうできるわけですよ。Wi-Fiも使えるし、**書き物とかするには圧倒的にこういう環境がいい**っていうのがわかりました。これは沖縄ですけれど、こういうところで仕事がもうできる時代だということですよ。

そうすれば**満員電車に乗ることもない**し。あとは在宅の発見は**通勤時間がない**のですぐに仕事にとりかかれるということと、終わったらすぐ食事の用意などができるってことですよね。**始業と終了が圧倒的に早くなる**ってことですよ。

佐藤

僕も先日ビジネスパーソンと話をしていたら、**オンオフの切り替えができない**と。ずっと家にいるから。僕はずっと仕事やってても一歩ちょっと外に出ると、別に通勤とか30分とかの時空間移動がなくても、外の空気吸ったりするだけでオンオフ切り替えられるんですよ。都市の中で、ずっと家の中でずっといたりすると、オンオフの切り替えは確かに難しいだろうなって思いますね。

松田

移動の制限がある中で、今年いっぱいぐらいは東京から地方に行くことに対してちょっとネガティブな捉え方されるかもしれませんが、**時間が経てば、間違いなくその方向に行く**と思うんですよ。数週間くらい前の日経新聞に日本電産の永守会長が、**通勤手当を止めて給料を高くして山梨に住んでる人が東京本社とリモートワークするのが当たり前になる**かもしれないと。あとは**企業はこれからサテライトオフィスに投**

**資しなきゃいけない**ってことを書いてあったんですね。結構なんかあの収益至上主義と思われている人がそういうこと言っているのはすごいインパクトがあって。

大企業で言うと東京のオフィスって坪5万とか6万とかで1フロアでっかいビルだと1,000坪だと月5,000万円。年間何億、何十億ってお金をかけてる企業があるわけですよね。多くの社長が気づいたのは、**社員が来ていないオフィスに年間何億も家賃を払っている意味ないじゃないか**。であればサテライトオフィスに投資するか、通勤手当やめるだとか、まちがいなくこれは在宅だとかサテライトオフィスとかリモートワークとかの流れになると思う。

僕が今ちょっと懸念しているのは**排除の論理**っていうんですかね。東京から来ちゃったのっていうね。それがね今一番の僕の懸念ね。

佐藤

本当にそう思いますね。だって東京で坪2万から3万だとして高いとこだと5万くらいで、多分社員一人あたり2坪くらいは使ってると思うんですよ。家賃負担として5万円から10万円だったらそれをもらった方がいいだろうし。**これからはそれこそもっと社員と社員離しましょうね**っていうと**多分3倍くらいの面積が必要**になるとすると15万とか20万とかの家賃負担できるかっていうと多分できないと思うんですよ。

同じようにシニアの高齢者向け住宅なんかも、**食堂もこれくらいの面積で済んだけど、もうちょっと広く取らなきゃいけない**のとか、都市の中でもうちょっと**レクリエーション広くやろうね**と言うと**必要な面積が増えちゃう**し、土地の高い値段のところ、まあ土地さがっちゃうのかもしれないけど、多分**今まで以上にお値段高くなっちゃう**と思うんですよ。価値観と価値のバランスだと思うんですけど、だったらじゃあ地方にっていう流れは必然的にメインストリームになる気がしますよね。

松嶋

オークのあたりなんか一坪1000円くらいですからの東京の大手にでも買っていただいて、あの僕らがジャガイモでも植えたいなとか思いますけれど（笑）。それはともかく、ちょっと興味本位でお聞きしたいんですけど、あの今都市と地方っていうキーワードがあって、最近特にその地方創生とか地方へみたいな感じがあるんですけど、僕らはその地方にいるとその言葉の意味が分かんないっていうか、その地方は地方で頑張ってるつもりなんですよ。東京にサツマイモを送るために僕らやってるわけじゃなくてね。

ちょっと話飛びますが、岩手県の宮古市っていう本州の最東端に重茂半島っていうところがあるんですけど、そこで取れるわかめがめちゃう美味いんですよ。めちゃう美味いんですけど、全部東京の三越にいったるんですね。岩手の人は純度100%の重枝のわかめはほとんど食べることがないし、もっと言うとそんな美味しいものがあるって知らないし、逆に東京とかに多って、いや実はこれ宮古のですよとか言われて初めて気付くくらいの勢いだと思うけど。そんな感じでその地方も流れてるんですけど、コロナで地方創生とかですんね地方に地方にっていう風にあるんですけど、僕らからするとなんで今更地方なんだろうとか、そういうふ

うに思うのがあって、誤解を恐れずに言えばちょっと上から目線なのが否めない。僕はやっぱり東京に対するコンプレックスはぼちぼちあるから、地方創生とかその言葉にかなり違和感があってなんなんだろうとも思うんですよね。

佐藤

それはそうかもしれないですよね。松田さんどうでしょう？なんてふっちゃいますけど（笑）。

松田

まあ、何でしょうね。個人レベルで言えば、あの個人の話とね、これは国の話と、企業の話と仕訳したほうがいいと思うんですけども、個人レベルで言えばやっぱり**地方に行った方が豊かで人間らしい暮らしができる**というのを、僕自身東京で生まれ育ったから実感したりするところだったりしますよね。オークに行って窓を開けて深呼吸をするだとか。東京でやるわけじゃないですか（笑）深呼吸なんて。そういう話で言うと水道の水が美味しいだとかなんでしょうけども。

国が税収を抑えていて地方交付金も地方に配っていて、許認可制度も国が握っているということを考えると、地方創生っていうことも出てきちゃうとすると、まあそれはそれで仕方ないとすると、地方じゃなくて**わが町主導**で、わが町をどうするんだっていう見方をするのが大事なんじゃないかなと思いますね。

今回はコロナをきっかけに、その「**憎悪**」みたいなのが出てくると思うんですよ。

佐藤

ぞうお？

松田

そう。憎む。さっき他県ナンバーの話とか営業している飲食店への自粛警察だとか、あと地方に行くと感染した人への排除がハンパじゃなくて、横浜のクルーズ船に乗ってた人が九州とかに還ったらいられなくて出ていったとか。僕はその今憎悪とか排除とか出てくるのが問題だと思う。

地方創生の話でも、**都市と地方とかいう対立軸をもってくるんじゃない**で、なんていうかな、純粹に、わが町をよくなるとうなるのかとか、岩手がよくなるとうなるのかとか、沖縄がよくなるとうなるのかとか。東京がよくなるとうなるかっていうわが町手法でいくのがいいんじゃないかなって思いますよね。

佐藤

あとでまたちょっと共有したいと思いますけど、**安心社会から信頼社会**へって本を書いた研究者の方がいて、日本は安心社会だけ信頼社会じゃないみたいなことを書いてるんですよ。安心社会って何かって言うと、そのシステムの中に入ってる人達は安全だから自分が判断しないでいいよっていうシステムとか世界観な

んですよね。信頼できるかできないかということを思考停止して構わない社会が安心社会だから、要は排除して行くんですよね。色んなものを排除して、排除しきって残ったものがそのシステムを維持する安心社会のメンバーみたいな。だからその人がどういう人かみたいな信頼するとかっていう概念が存在しない。今だから、そこを安心社会から信頼社会へ変えてくべきだっていうのがその人の主張なんですけど、僕もそれに完全同意していて、多様性だったりとかそのシステムに頼るんじゃなくて、その場面場面とか、ケースケースでとかっていう知恵とか方法論を持たないと、その排除するとか自粛警察とかなくなるんじゃないだろうなーっていうのがあります。

浜松ナンバーの車に静岡に来るなみたいな。浜松は静岡なんですけど、自分のところと違うナンバー見たらもう排除しようとするその脊髓反射性は怖いものがありますよね。

松嶋

実はあの東京から一時的に避難してきた方があって、僕もすっかりうっかりしててって言うか、**ちゃんとプロセスを経て**やるべきだったんですけど、ちょっとそのプロセスがちょっと未熟だったために相当な問題になったんですよね。

僕はの一人一人の入居者にちゃんと説明して歩いたんですけど、話してるとかなり偏見って言うか、自粛してもその2週間自粛の後に PCRをやらなきゃいけないんだみたいなことがあって、それを僕はね、いちいちあの多少ちょっとこう怒り口調になりながらも、そんなことは意味がないしそれだったらもうあんたが出てった方がいいんだ！くらい、入居者にも言って、まあこれを信頼社会って言っているのかどうか分かんないんですけど、ちょっとそういうこともあってですね。

一気に飛躍しますけど、**まあここで染っちゃったら仕方ない**なと。

佐藤

そうそう。それですよね。

松嶋

オークで、この人からもらったらまあ、しゃーないくらいな、こう環境作りをして。

この前あまりにソーシャルディスタンスをみんな守ってくれないので、結構かなり真剣に怒ったんですよ。僕らはねあんたたちの命を守りたいんだからちゃんとやってくれよと。でもその代わり僕は死ぬ気でね、みんな守るつもりだからちょっと頑張れって言ったら、入居者さんが大先生がそこまで言うんだからみんなでね、やろうじゃないかと。何を言いたいかって言うと皆**安心とか安全とか訴訟リスクを回避して、ちょっとずつみんな Social Distance**じゃなくて**気持ちもだんだん離れて**いって、本来に**来殺伐**としてる中で、逆に**限られたコミュニティ**になってるからこそ、**徹底的に言い合**ってって言うか。そこが僕は医者としての本当に得してる部分です

けど。さっきの憎悪もそうですけど、あの **Social Distance** という名のもとに**どんどん今気持ちが離れて** いったる気がしますね。

松田

明らかに光と影があることは確かであって、影であればさっきの憎悪だとか排除だとかみたいなことがあると思うんですけど、シニアの住まいで言えばね。光の部分で言うと**デイサービス無しで助け合うとかお互いを良く知るだとか**、さっき松嶋先生が言っていた、**この人にもらったら仕方ないみたい**な両方あると思うんですよ。

働き方の方で言うと、便利になった面で言うと、**オンラインミーティングだとか圧倒的に効率化できる**ことが分かったし、あと、こういうことやっている、働いている人と働いていない人が良く分かるなと（笑）。だって在社しているかとかって関係なくなるじゃないですか。何をやったかですぐ分かっちゃう。明確にわかるようになりましたよね。

良くないところはね、なんだかんだいって、僕なんか集まってわって話したりだとか、朝会社行ってコーヒー淹れるところで、**無駄話**しているのが実は情報源だったりして、そういうのが無いっていうのが影の部分かな。

佐藤

**働き方とか働き様**はやっぱりかなり悩むと言うか、考え直しますよね。シニアの住まい方自体も別にハードありきとかプロダクトアウト的な発想する気は全くなくて、シニアの方自身が**生き様**を考えたってあるのかなと思って。パチンコで染って死んでもいいやとか、パチンコ行ったことが原因で死ぬのはさすがに嫌だよとか。その価値基準の天秤っていうか、孫に会うためだったら染ってもいいか、みたいなのもあるでしょうし、この**生き様に関してちょっと自覚的になった方もたくさんいるんだとする**んだったら、それに合うような住まいのあり方みたいなものを作っていきたいなあと思いますよね。

松島さんみたいなリーダーシップを発揮できるのは、すごい珍しいと思うんです。そこは絶対リスクマネジメント型になると思うし、そうすると生き様とは全く違うところで事業者がやっていこうとするとデストピアで、何とかできないうのかなって思います。

松嶋さんがお医者さんだからそれできるんですかね。

松嶋

医者だからやっぱり無条件にリスペクトされてしまうっていうところはあると思うんですけど、それだけでみんながついてくるか、あるいは皆が賛同するかって言うともちろんそうではなくて、手前味噌ながら言うと、オークは最後の砦だと僕はいつもうちのグループの中で思ってるので、やっぱり**守りきるの**だっていう**本気感が伝わってる**んだろうと思うんですけどね。

まあでもあのちょうど一週間後に外でピアノの演奏会やるんですけども、最初やるって言った時に**マスコミにたたかれるからやめろ**ってある入居者さんが言ったんですよね。いやいやこれはイベントじゃないと。オークの**日々の豊かな暮らしを維持するための日々の暮らしじゃないか**と言ったら、逆にすごい賛同してくれて。だったらやっぱりこういう時代にね、いつも人々を救うのは芸術とスポーツだったから、じゃあ思い切って外でやろうじゃないかと**逆に入居者さんからご提案**してくるんですよ。じゃあ外でやろうってということでね、来週一週間後にやるんですが。

佐藤

マスコミから叩かれるって、そうですね。それが怖いんですよね。

松嶋

一般的なあの普通のリーダーとか普通の事業者だったら、**やっぱそだよ**ねって話になってそれで終わったと思うんですけど、叩かれてもいいとまでは言わないですけど、何かあるんじゃないかなっていつも思いますよね。

佐藤

ほんとにそこをやっていかないと。僕なんか自分が入りたいシニア住宅って言うか、シニア住宅って言うていいのかわかんないですけど、自分が将来住みたい、こういう暮らしをしたいということで、つくって来ますけど、やっぱりもう自分で作るしかもうないのかなとかね。オークに行くしかないか、とかね。

オークと沖縄と東京とで松田さんがぐるぐる回るのかな、みたいな（笑）。

松田

回遊型居住が僕のめざすところ（笑）。

佐藤

ホント来てくれるんじゃないかと、そういう生き様とか働き様を考えて、そういうコンセプトで市町村もリーダーシップとってくれると凄いい感じがしますよね。オークという一つの施設だけじゃなくて、行政がやっぱそういう立ち位置と言うか気持ちでリーダーシップとってくれると、逆参勤交代もそうでしょうし、withコロナの時代のモデルができそうな感じがしますね。そういう自治体ってどこにあるんですかね。

松田さん、それだったらここ、みたいなありますか？

松田

いやー、コロナの部分で言うと、今臨時交付金が出てますけども、話を聞くと、目の前のあれですよ。廃業寸前の店の支援だとかもうそっちの方で手一杯で残念ながら自治体が中長期的なまちづくりだとか、少なくとも今回の手は打ててないですね。

まあ、それは市町村の立場に立ってみればもう明日廃業してしまうところを何とかしようというのが優先順位が高いのでね。

それはもうこれからセーフティーネットは官主導でいくのでしょうかけれど、**これからの在り方というのは民でやっていくしかないのかなって思います**よね。官はセーフティーネットと邪魔しないこと、あと減税だとかね。そういうことでサポートするんだと思いますよね。

佐藤

今回ちょっと興味深かったのは、リーマンショックの時はお金が消えたじゃないですか。でも今回ってお金が消えた訳じゃなくて止まったんですよ。ある一部のお金の流れが止まって**お金の流れ方が変わった**んですよ。僕なんかあの近所で、ここ大丈夫かな、つぶれちゃうんじゃないかなって心配していたお店が結構売上伸ばすようになってたりして、周りの人達はほとんど行ったことが無かったようなお店が知られるようになったりしました。ライカムとか都市部で流れてたそういうちょっとグローバルチックなところにお金 flowed ののが急に**ローカルにお金流れるようになって、少し経済圏に変化が出るきっかけ**とか、違う可能性とかがあるといいな、っていうのは感じたんですよここ2ヶ月の間で。

松嶋

やっぱ地方交付金と言うかそうは言ってもどこの地方もやっぱり東京からお金をもらってるようなもので。僕九州のある500人の町の役場見た時に驚愕したんですよ。すごく立派で。500人って言ったら僕の母校の高校は1,000人で高校よりも少ない。僕は生徒会長とかそんな事もやってたんですけど、そうか、ここで村長になるのは高校の時のあの選挙よりも簡単だっていったらその地方の人にも怒られますけど（笑）。すごい立派で、あれも相当東京からお金が下りて。地方は箱物しっかり整備して、あの東京からのお金流れてこさせるんだみたいなもうずっとこれまでもあって、その八幡平市なんかでもいかにその箱物をちゃんと整備して、東京からね、人の流れとかあるいはインバウンドとかを呼び寄せて、外貨を落としてもらうんだってことばかりに、補助金とか税金も使われるんだから、何かやろうって言うと自主財源でやる気はさらさらないんですよ。国の財源持ってきたらやるよ、とか。

もうちょっとあの地方も身の丈にあったことをやるべきじゃないかと。そうなれば何もできないじゃないかっていうのもあるかもしれないけど、でもやっぱり八幡平には今日もあの入居者さんが言ってましたけど、あの木を見てごらん、だいが青々して緑になって美しいわね、とかそういうところで皆感動して暮らしてますからね。

別に何も**みんな東京になる必要はないので、地方のその身の丈にあったよさを追求する**ような、そういうふうに行くといいなと思って。だからオークフィールドも外に外に外に向いたところもあるけれど、今年から畑

もしっかり再開して、ここで取れたもので美味しいもの食べようねとか、何かそういうディズニーランドに行かないか楽しくないんだとかっていう発想よりかは、**地元で足元で出来るようなことをね、やっただいいんじゃないかな**と思ってるんですよね。

佐藤

そういうことにも価値を持ってもらうようにっていうか、価値を感じるように、**シニアの人だったり若い人たちの考え方とか価値観がシフトしてるとやっぱりいい**ですよ。

雅子

ちょっとよろしいですか？

佐藤

どうぞどうぞ。

雅子

私はライターの仕事をしていて、まちづくりにもちょっと関わっているんですね。私の周りで今起きていることは、まさにパラダイムシフト起きるかなっていうぐらい、自分たちでもう畑やって、食べてかなきゃいけないよねっていう雰囲気が高まっています。

佐藤

それは年代とかどんな方々ですか？

雅子さん

年代はね、いろいろですけど結構面白くて、30代～60代くらいまでですね。

面白い現象だと思って見てるんですけど、いかに国が当てにならないか、行政が当てにならないかということを私たち今回、思い知ったって感じがするんですね。であれば**私たちって何が出来るんだろう**って言う風に考えている人が増えてきている気がします。これはものすごくいいことだと思っています。

申し込みの時のキーワードに、**一極集中**っていうことと**コロナよりも人間の方が怖い**っていうことを先ほどからちょっと出ていますが、本当にそういう気がしているんですよね。もうちょっと**人間が本当に暮らしやすい、本来の人間としての生き方みたいなもの**をやっていくためにはどういう風にしたらいのかっていうことを、考えていくといいかなと思っています。

佐藤



やっぱり今までの生き様とちょっと変える必要があるって認識ってことですよね。

今の「**私たちは**」、ていうのはすごくいいなと思っていて、今まで何気なく私達とか私達はとかって使ってたのが、このwithコロナの時代に私達って言える人はどこまで誰が存在するのかっていうのは結構大事かなってすごい気はするんですよね。

松嶋

私達が私達のために作ると絶対農薬使わないんですよ。東京に送るからね、これはちょっとあえて毒を言いますけど、東京に送るから、東京で誰が食べてるの見えないから。それだったら大量に送って、東京からお金が欲しいから、お薬いっぱい使って、あの形の良い野菜作るわけですよね。

でもね農家の人も言ってますよ。自分たちで食べるのにお薬使わないって。なんで自分たちで食べる時に薬使わないのに、東京に送る時は、東京だけじゃないですよ、市内でも出回るんですけど、農薬使うのかっていう話なんですよ。僕らも畑二つ持ってますけど自分たちで食べますから農薬使わないですよ。

佐藤

せっかくって変ですけど、移動ができなくなった時に、オークフィールドに住んでる方々がいて、オークファームとかで野菜とか作って、そのさっきの雅子さんみたいに自給自足みたいにやって、でもその方々のご家族とかご友人とかって東京とか都心部に住んでたりするじゃないですか。その中でWeってゆうか私達って言える感覚がもてると、何かすごくいいなあって。オークファームで出来た物をオークだけで食べるんじゃないで、オークのご家族とかに送ったりとか。

そうするとさっきの松田さんの憎悪とかって話じゃなくて、どうしても今のwithコロナだと移動ができないので、ローカルな物理的な距離感しかWeになりえないですけど、そうじゃなくて、その**物理的な距離感を超えてWeみたいな概念、私達って言う概念**がいろんなところに、せっかくテクノロジーも進んでいるので、そういうのやないとモデルだったりとか、これからの時代の暮らし方とか生き様みたいなものって作っていけないのかもしれないですよね。

松田

今佐藤さんが言われた文脈でいうと、実際に今は**移動はできないんだけど、地方と関わりを持つっていうことはできる**と思っていて、この前長崎の離島の壱岐ですね。去年逆参勤交代で十数人でいったところなんですけれども、Zoomでオンラインで繋げて、向こうの人がカメラで朝市、魚とか野菜とかを撮ってくれて、その場で購入していきっていうのをやったんですね。**オンラインバーチャル逆参勤交代**（笑）。

佐藤

なるほど。

松田

結構カメラが揺れて酔っちゃったんです僕（笑）。まあ慣れてないからね（笑）。でもね、そうすると、移動しなくても、あ、あそこの朝市でこういう取れたての魚がありましたとか、野菜がありますとか、実際買うとびっくりしますよね。味が濃くてね、アスパラだとかね、甘いんですよ。そうするとファンができるわけですよ。じゃあ、コロナが落ち着いたら、行きましょうかと。で、あ。今光行さんいるのか。光行さんとかと落ち着いたらね、2、3日リモートワークしようみたいなことをしようと。ね、光行さんちょっとふっちゃってあれですけど。

光行

光行と申します。私はずっと愛知で働いていたんですけど、1年半前から東京に出てきて、中ぐらの過密状態の愛知から超過密の東京へ来て、松田さんとお知り合いになって、あの逆参勤交代も私実際壱岐にも足を運んだことがあるんですけども、そんなご縁もあったものですから、今回私どもの東京のオフィスのスタッフでですね、何かこうこの時代に地方の方と繋がりを持ちながら、新たな生活のスタイルだとか新たなビジネスっていうことが成り立つのかどうかなっていう話をしている中で、ちょうどじゃあ是非壱岐でライブオンラインショッピングをやってみようじゃないかということで、今松田さんもおっしゃられたことをやってみました。

そうしますとやった仲間で壱岐に行ったことがない人でも、壱岐というものに興味を持つし、またビックリしたのがやはりその市場のお店のおばちゃんとかおじちゃんとかが、自分の持っている商品を説明してくれるんですよ。これは今日取れた鰯をすぐ干してきたものだとか、今はイカが旬だからおいしいよだとか。そういうことって東京にいてもわからない情報で、そういう新たな、普通に観光に行ってもわからないような情報がこのZoomによるオンラインショッピングっていうことを通して体感できたというのは、少し新たな地方と都市のつながりの可能性っていうものを感じさせてもらえたなと思ってます。

松田

食べ物とかもね、そのわかめとかすごいシャキシャキしてびっくりして、結構感動しましたよね。まあまあね、いい値段とるんですよ。ダンボールひと箱入って5,000円くらい。送料でね、2000円くらいかかるけれども、やっぱりでも買う価値はあったなって思いますよね。そうすると、ファンづくりとしてそういうオンラインでの商品の紹介だとか、次は本当に行ってみましょうとか、一週間滞在しましょうとか、間違いなく起こりますよ。

佐藤

そうですね。さっきの顔の見える関係って松嶋さんが言ったのがすごい大事なんでしょうね。それがまあ100人なのか200人なのかわかんないですけど。

光行

私も今回の経験した感じだと、あのもちろん朝市のおばちゃん達は観光客と対面で話すって言ったことは当然今までもやっていたと思いますけども、こういったリモートでしかもこのiphoneのカメラを通じて東京の人と話をするっていう経験はとても新鮮な体験だったんじゃないのかなと。そう言ったところからまた新たな関係づくりって言うのにつながってくると大変面白いな、っていう風に思いましたね。

佐藤

僕が今例えば沖縄でほんと母なんかもう85じゃなかったらとつくのとうにこっち呼んでると思うんですけど、なのでもし先ほどのその生き様が変わって、都会があまりフィットしないなっていう方だったら、もっと60から70とかかな全然元気な段階でこっち来たらっていうのとか、顔の見える関係を結びたいと思うんですけど、今そこをどうやって接続してかかっていう手段、前だったら僕なんか普通にセミナーやって、直接65歳から70前半のシニアの方々と、こんな暮らし方どうですかってリアルに顔を突き合わせて、それこそ三密でいろんなブレストしたりディスカッションしたりできたんですけど、**その方々とのコンタクトの取り方の難しさ**っていうのはすごいもやもやしています。

どうやったら、いいのかな。幸田さんいるから幸田さんについて聞いてみようかな。

幸田

あの初めまして。幸田と申します。東京の方で本業はコミュニティデザインとか地方創生なんかもやっていますけども、僕も東京で長くて地元が岡山県の田舎です。今の話聞いて僕も地方創生の仕事してたりするので思ったのは、**祭り**かなと思って。なんか今**不要不急で一番消えたものは祭り**だから。例えばさっきの開疎のパラメーターみたいなものの中でも、都会でも田舎でも今不足してるものが祭りだと思っていて、逆に田舎にいってもやっぱりその文化的なものとか、あのカレンダー的なものとして祭りが根付いてて、それ中心にいろいろ物事が動いたり。もしそれがなかったらすごい寂しいと思うんですよね。でもなんかあの都会の人も意外とおじいちゃんおばあちゃん達もあのなんか文化的な、祭りのなものとか、それがまあ現代だったらそれが演劇とかお芝居とかかかもしれませんが、何かしらそういう経済じゃないところのなんか循環の中で面白がってたはずなんですよね。僕らの世代だったらスポーツとかなんですけど、今根こそぎないじゃないですか。さっきの話に戻ると僕もまだ答えはないんですけど、**オンラインでもオフラインでもお祭りのなものをどうデザインするか**みたいな。地方と都会をつなぐっていうのも、お祭りとしてなんか上手くつなげたらなんか分断しないで済むかな、とか。

なんかそれが今経済の話ばかりになっちゃっていて、僕もその地方の魅力ってやっぱそこにあるかなって思っています。

佐藤

**身体性**ってすごいやっぱり僕も大事だと思ってて、この2ヶ月身体あまり動かしてないんで。沖縄ってあのこれ、これやったことあります？カチャーシー。やっぱり身体性で誰で分からなくても見よう見まねでできる、飲んで盛り上がったら、なんか一緒にやろうよみたいな。わからないけどやるとなんか楽しいみたいな。お祭りみたいなデカイイベントじゃなくてもなんか、そういう身体性を一致させて空間と時間を共有するみたいな。それあるかないかっておっきいですよね。

幸田

なんかあのWeの話がね、私もなんか意外とそういうちっちゃいお祭りみたいなものとかがやっぱり基本になってるかなと思っていて。僕らはそういうのをもう一回再定義するというか。なんかそういうのが豊かさに関係あるかなー、なんかそれもどうしたもんかなーというところですね。

佐藤

例えば東京の、今それこそデジタル格差じゃないですけど、多分こういう議論も色んな所でどんどんどんどんされていって、いろんな試みとかされると思うんですけど、オンラインにすごいといえるか、**デジタルに対して苦手意識がある都会のシニアの方々とかって、どうやってこう拾ってけばいいんですかね。**

幸田

どうなんでしょね。みなさんねー。そこらへん僕も意見聞きたいですね。

佐藤

なにかそういうアイデア持っている人いないかな（笑）。そうすればね、お祭りとかも一緒にできるかなと思っているんですけど。

松田

いつかお呼びしたいと思っているんですけど、東京で**インターネット・オブ・シニア（IOS）**っていうのを立ち上げて83歳の男性がいるんですけど、彼はそういうIpadとかを使ってシニアの孤立だとかを防止して、シニアの社会参加とかつながりを促す活動をしている人がいるんですけど、そういうひとが何と云うのかな、こういうときのヒーローだとかヒロインだとかになって出てくるのが大事だと思いますよね。

結構ね、教え方が難しいとかいってて、こういうことを考えているんな人がいろんなところでやるんだけど、東京でやるとすぐ男のおじいちゃんが、「そもそもWi-Fiとは」みたいな話から始まってとても不評だったり

（笑）。女性が教えたり、東京じゃなくて地方で教えると、これを使って孫とちよつとやりとりしましょうよ、ってゴールから見せるらしいんですよ。それですごく好評だと。

だからこういうオンラインでつながっていく時に、**普及のさせ方っていうのは、すごく大事**だなんて思いますよね。

佐藤

ちょっとその方ぜひお呼びしたいですね。

松田

牧さんっていう83歳の男性の方なんですけど。

光行

あの今の高齢者にいわゆる ICT を使っていただくこと言う試みは、弊社デンソーなんですけども、ちょっと今やっております、都会というよりも逆に本当に地方のどちらかという過疎に近いような町村で、お年寄りの方に対しての見守りと、それから防災のための、地方に行く防災放送で必ず流れるものがあると思うんですけど、あれが全国的に老朽化してきていて、更新の時期に差し掛かってきて、あれを更新するくらいだったら、その街の人々、村の人々にタブレットを配って、タブレットにその警報を出す。今までですとその瞬間で聞いている限りは、鉄砲水が来るのか火事があったのかっていうことが聞いていないと分からないんですけど、タブレットだと見落とししたりしていても確認ができますので。

弊社として地方自治体さんの方に今提供し始めていまして、まずそういうところからお年寄りにもタブレットとかに触っていただいて慣れていただいてから、お祭りの情報とかをそこに流したりとか、自らもそこに映像流せるようになったりとか、そういう段階的なことも必要なのかな、って思います。

佐藤

もう小学生だけじゃなくてシニアにもタブレットとかスマートスピーカーとか配って欲しいですね。

光行

きっともう最初の一步っていうか、一つの指で触ること自体が最初怖いみたいで、壊れちゃうんじゃないかと。安心していいんだよっていうことを、いかにこう画面を見せながらやるのかとか、そのあたりがすごく難しいけれどもやりがいがあるみたいですね。

佐藤

松嶋さん、すみません。

松嶋

ちょっと祭りじゃなくてもいいところがあるんじゃないかなって話なんですけどね。うちのオークフィールドはわずか32室でまだ15人くらいしか入ってないですけど、32室の集合住宅で、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、あのレストラン棟がちょっとだけ住居棟から**離れて**あるんですね。住居棟を出て10歩くらいなんですけど、あのちょっとした異空間なんですよ。

周りにはもう本当に自然と言うか何もないところで、お祭りのようなこともないしまた街もないしでもそれなりにみんなあの豊かに暮らしてるんじゃないかなって思うのは大概ご飯とか食べた後は部屋にみんな戻って引きこもってるんですよ。でもちよいちよいテラスに出てきて、みんなテラスにずっといるわけじゃないんだけど、スタッフは大概一人か二人厨房にいて料理を作ったりとか、あと今日なんかは僕もいってレストラン棟の2階で診察してたりとか。あとは下にスタッフが子供連れてきたりとか。

結構閑散としてるんだけど一人二人ポツリポツリってですね。そういう時に結構入居者さんがポツリポツリくるんですよ。なんか一言二言話して帰ってたりとか、僕の様子見て缶コーヒー持ってきてくれたりとか、それでまた部屋に戻って行って。大概は引きこもってるんだけど、何かある時にちらっとテラスに来て、厨房のスタッフと一言二言話したりとかね、本当に一見するとさもないことなんですけど、**案外困ったら何か来て水がちょっと出ないんだけどか、電気切れたんだけどか、どれどれじゃあ今行ってみようかみたいな感じで。さもない会話なんですけどね。まあやっぱり何かあった時にあそこに行けば、誰かと繋がれる、相談できる、ただ一つあるだけで結構なんか安心で、素朴だけど豊かな生活**のように見えてなりませんね。

佐藤

なるほど。

松嶋

だから必ずしも皆が集まってイベントとか、決してあの私の Facebook はどうしても派手なのでいろんなイベントやってるように見えますけど（笑）、実は九割五分は何もないわけで、でもみんなそれなりに豊かに見える暮らしになっているからなんでだろうなって思いますよね。

案外シニア住宅とかも、居室をでたらみんな飯食うところとかな風な構え方だから、オークの構成は本当によくできているな、と思いますよね。**ちょっと離れる**んですよ。

佐藤

ハレとケって良く言いますが、東京ってずっとハレなのかな。毎日毎日がお祭りみたいな感じで。ゆったりとした日常とかがのは退屈って捉えられていて、あんまりないからなのかな。静かな日常とその非日常っていうのがやっぱり95%と5%くらいで、95%の方が大事なのに、5%の刺激が強すぎてそっちを求めちゃうみたいな。

すみません、結構時間が過ぎてしまって。僕やっぱり二人の話聞いて少し考えるキーワードが見えた気がしています。すみません参加してくださってる方、全く予定不調和なので参考になった話とそうじゃない話とあったかもしれないですけど。

ちょっと生き様がどういう風にこれから変わったかっていうのもちょっと肌感覚で知りたいなっていうのか、その排除しない論理で都市部と地方のWeっていう感覚を持つ具体的な方法だったりとか、逆参勤交代でその6次化の自給自足のところをどうやってやっていくかとか、ちょっと色んな事を本当また具体的に考えていきたいなあと思って。

ゲストのところもちょっとまた相談させてください。どういう方をお呼びして、具体的に掘り下げるとか。ここで話すればいいんですけどちょっと時間があれだと思うので。またちょっと次回お時間いただきたいなあと思うので。ご参加された方すみません、もし聞きたい事とか質問とか、ご意見でももしあれば時間あまりないかもしれないですけど。

若山

よろしいですか？

佐藤

どうぞ

若山

ありがとうございました。生きがいという観点ではいろんな意見でていましたけども、実は私生きがいともうひとつ、「死にがい」という**観点**があって、ここは今回何も出ていませんでした。ようするに、**ここでだったら死んでもいいなって思えるような場所**ですね。もう団塊の世代で73歳になるので、そんなことも考えています。

佐藤

そこは考えたいですね。ここじゃないなって考えたり感じた方いらっしゃるんじゃないかと思うんですよね。今回のコロナで。「あれ？俺ここで死ぬの？ここじゃねーだろ。」って。

じゃあ、どこだ？っていう話なんですけど。

若山

都会でもいいんですよ。都会でもいいんですけど、ここで死にたいな、っていう。そこをぜひ！

佐藤

またそこは深掘りしましょう。そのテーマはぜひやりたいと思います。

名須川

はじめまして。名須川と申します。普段グループホームで働いているので、私は聞きたいこととして、「認知症になっても、暮らしやすいまちづくり」というか環境づくりというか、ちょっとそういうところに触れていただきたいとありがたいな、というのが個人的な意見としてあります。

佐藤

ありがとうございます。

松嶋

これはですね、ちょっとあの短時間で終わりたいと思うんですけど、僕はあのお言葉を返すようなんですけど**認知症の有無によらず、安心して暮らせる社会**を作りたいと思っていて、認知症になったからなんか急に優しいっていう訳じゃなくて、認知症だろうがなんだろうが住みやすいというのが大事だと思っていて。オークは本当に重度の認知症の人が入ってるんですよ、私が担当してるので。これ本当ですね、どこのグループホームにも負けない本当あの岩手県のヘビー級チャンピオンくらいで（笑）。ホントヘビー級チャンピオンがいるんですけど、そうだなあ、100回200回くらいもちろん会ったことがある人でも、「あらかどこかで見たことあるような顔ね」から始まるわけですよ。それはまだマシなほうで、ほとんど覚えてないんですけど、でもそういう人が入って大丈夫かなってみんな思うんですけども、家族が腹くれば大丈夫だよって僕は言ってるんですよ。要するにスタッフは夜泊まってないわけですよ。もう本当に1秒前のことを忘れるようなおばあちゃんがつい先日入って、夜にそこそこ出歩いて。誰も泊まってないですよ職員は。ほとんどの部屋をノックして歩いてたんですけど（笑）。8割方みんなボケてるんですけどね、トントンされたの次の日に忘れてるからいいんですけど（笑）。何人か覚えてる方がいてちゃんと部屋に誘導してあげたりとか。

多分名須川さんとかが見ていただくと、「こんな夜泊まってないところにいるなんて信じられないし、もし転んで朝まで見つからなかったらどうするんだ」って話になるんですよ。でも僕は家族に、そういうこともあるかもしれないけど最善を尽くしますし、あと**家族が腹くれば大丈夫**ですよって。僕も本当我慢して、僕のモットーは**入居者を信じきる**ですから、本当に大丈夫だ絶対この人はここで一人で暮らせるはずだって信じてると、本当にね、ろくにヘルパー何か入れなくても暮らし始めるんですよ。これはもうちょっとグループホーム運営されててあの本当恐縮ですけど、あれを見て僕はもうほんと介護授業バカバカしくなって、ほとんどの介護事業撤退したんですよ。

もちろん難しい人がいるのも事実ですよ。認知症の種類によっては。その種類っていうのはちょっと専門的ないですかピック病とかちょっと人格が大幅に変化してくるような難しいですけど、そうじゃないアルツハイマー型とかレビー型っていう人格が比較的維持されてるタイプの認知症の場合はどんだけ物忘れがあっても、どんだ



け足腰が弱くなってても、それなりにひょいって飛び越えてですねやってますね。でそこをみんなで守ろうとするとやっぱり途端に弱くなってますよね。

佐藤

ほんとそうだと思うなあ。これから何回か議論して行って、こういう住まい方暮らし方っていいよねってなった時に、いやー松嶋さんだからできるんだよっていう風にしたいくないですよ。やっぱり松嶋さんだからできるってなっちゃうと、オークフィールドが唯一の存在としてなっちゃうし、それはそれで僕はありがたいですけど、やっぱりもっとたくさんそういう場所って増やしていきたいし、ニーズに合った場所とかシニアの方が死に様、生き様を求められてる場所とかつくっていかないといけないと思うので。そこの松嶋さんじゃなくてもできる形とか、そういうのつくっていききたいですね。

富樫

新しい時代で地方でもシニアでも自立して生きていくやり方、大事なものは3つだと思います。YouTube、Zoom、Amazon（笑）。この3つが分かれば、誰でもユニバーサルにやれるんじゃないでしょうか（笑）。

松嶋

パスワード忘れちゃうんですよ（笑）。

富樫

You tubeは誰でもできますし、誰でも楽しめますからまずそこからかもしれないですね。

佐藤

ありがとうございます。

松嶋

松田さん、今度ハワイで講演したいねって盛り上がっていたじゃないですか。村田さんがハワイにコネクションがある方なので、ぜひご紹介したいなと思って。

村田

すみません。はじめまして、東京の村田と申します。ブルーオーシャンカフェっていうあの終活をテーマにしたコミュニティカフェを5年前から運営してまして、終活テーマのいろんなイベントやったりとか、あの地域の独居の高齢者集めて子ども食堂と一緒にみんなの食堂とかいろんなコミュニティ活動していたんですが、コロナの影響

でちょっともう密閉空間に人を集められないとか、飲食を出すのが向こう一年難しいだろうか、3月からもずっと閉鎖してたんですけど、今月末をもって物理的に閉めることを決断したんですね。とはいえブルーオーシャンカフェはオンライン上で残したいっていうことで、いろんなセミナーとかイベントをZoomオンライン化を6月から始めていこうと思っていて、松嶋先生にも一コマ医療について語る会みたいなのをやろうと先週盛り上がったんですけど。ブルーオーシャンカフェの理念とかビジョンは「**生きるを支え、人をつなぐ**」っていうビジョンなんですけれども、それをこの物理的なカフェがなくなっちゃって、**オンラインでどこまで出来るのか**っていうのは、このコロナがくれたすごい大きな課題だなあと。**コミュニティづくりってオンラインでもできるんだろうか**と。それを考えていきたいなと思って、すごくいい縁を頂いたなと思ってまして、ありがとうございます。

佐藤

もう本当多分走りながら考えるみたい。いろいろなことに試行錯誤で取り組む必要がありますよね。ぜひぜひちょっとそこもさっきのお祭りの話じゃないですけど、やれたらいいですね。

松田

ハワイのCCRCも考えましょう（笑）。

佐藤

やりましょう、ハワイ（笑）。

行っていいのかって話はありますけど（笑）。

佐藤

では、すみません。長時間ありがとうございました。

松田

ありがとうございました。

松嶋

ありがとうございました。

以上